

北タイ農村における村落構造に関する一考察

——村落の政治的支配をめぐる——

佐藤 康 行

一 はじめに

タイ農村社会の研究は、シャープとハンクスらのコーネル大学のタイプロジェクトチームが一九四八年から実施したバンチャン地区のコミュニティ研究を以て嚆矢としている。彼らがバンチャンと呼んだ調査対象地は一つの区（タムボン）ではなく、二つの区にまたがる七つの村落（ムー・バーン）からなっており、「政府が設定した行政村より幾分かは恣意的ではない」¹「領域であった。彼らは、行政村の構造は弛緩的であり、ならまとまりをもつものではなく、村人が寺院と小学校を共同に使用して生活しているコミュニティのほうが村人にとって大切であると考えたのである。しかも、彼らが採った方法的立場は、諸個人の関係と行動を文化のパターンから分析し理解するものであった。こうした彼らの研究姿勢は、その後のタイ農村研究に多大な影響を及ぼすことになった。

その後、キングスヒルとカウフマンが北タイと中部タイでそれぞれコミュニティ研究を行ったが、彼らの調査はコーネル大学チームの影響下に行われたコミュニティ研究の代表的なものであろう。彼らは行政村を対象とせずに生活圏としてのコミュニティを対象としたが、その理由は、「行政村 (administrative hamlet) はコ

コミュニティの恣意的な下位区分⁽²⁾にすぎず、村人の生活にとって重要なのはコミュニティだからである。なかでも、カウフマンが寺院をコミュニティのシンボルとして、つまりコミュニティ統合の核として把握したことは、⁽³⁾これまでのタイ農村のコミュニティ理解を示す代表的見解であるといえるだろう。タイ農村研究の草創期において、行政村に対していまだ重要性が与えられなかったのは、アメリカ農村社会学のコミュニティ研究が方法的に大きく影響を及ぼしていたこと、およびタイにおいて農村開発が開始される以前であったために、タイ農村自体が行政村として政治的に村落の機能が強化されていなかったためであろうと思われる。友杉孝はタイ村落構造の特徴について、明確な境界をもっていないこと、共同労働組織がないこと、自治組織としての実質が乏しいこと、家族・親族の重層的集合体であること、流動的であり、歴史意識が乏しいこと、自警団に類する組織がなく、防衛的機能が弱いことと整理している。⁽⁴⁾友杉によるこれらの村落の特徴は、これまでのタイ村落理解を端的に示している。タイ農村の村落構造は自治組織が弱く、村内の集団は個人的二者関係から構成されており、かつまた行政村としての機能はならぬ認められないとする考えが支配的であったといえるだろう。

こうした一方で、コーネル大学チームのコミュニティ研究に疑問を抱いてタイ農村研究を行った人に水野浩一とポッターがいる。水野は一九六四年から東北タイのドンデン村の家族と親族、村落の研究に取りかかり、タイ農村の原型を把握しようとした。彼はタイ農村の「原組織」は東北タイにあり、また調査地のドンデン村には「屋敷地共住集団」が顕著に見られることから、「屋敷地共住集団」の解明がタイ社会の「原組織」の把握において重要であると考えた。タイ農村はエンブリーが言うように決してルースではなく、村人は親族集団あるいは「屋敷地共住集団」に支えられて生活していることを見出すとともに、ドンデン村の「構造と組織は弱いにもかかわらず、村は一つの機能的単位をなし」⁽⁵⁾ていることを指摘している。というのは、ドンデン村では、村長を始めとする指導者が「堤防の修理、村内秩序の維持、個人と村の繁栄を願う種々の宗教行

事」⁶⁾を遂行しているからである。初期の水野は、村長と開発委員会の役割、さらに村落の組織と運営などに注目していたことに見られるように、行政村の視点からドンデン村を把握しようとしたといえる。しかし、その後晩年になるにつれて、しだいに社会構造論から文化様式論へと視点を移行させたため、「間柄の論理」から家族や親族、村落をとらえるように変化し、村落の構造的な研究をその後展開することがなかったのである。

他方、ポッターは北タイのチェンマイ地区で調査を行い、自然村 (natural village community) だけでなく、行政村 (administrative village) の意義を見抜いていた。チェンマイ地区は二つの行政村からなる自然村であるが、彼は行政村と自然村との関係について、「行政村はタイ農民の自己アイデンティティの一部でもある。……行政村の重要性、それと自然に居住しているコミュニティとがしばしば一致していないばかりか、寺院や小学校に通う範囲（両者はまた一致しているとは限らないが）ともしばしば一致していないことが、タイ農村を著しく複雑にしている」と述べている。自然村とコミュニティを同一視することには議論の余地があるが、行政村とコミュニティとの関係を検討することは重要である。そのためには村落の歴史的原型を把握する必要があると同時に、何よりも行政村の構造が明らかにされていなければならない。しかし、これまでのところ、タイ農村の村落構造が明らかにされてきたとはいえない。村落を運営するフォーマルな集団（委員会）は政府の命令によって設けられたものであり、そのため実質的にはなら機能しておらず、むしろ農民の日常生活にとっては寺院と小学校を中心としたコミュニティこそが重要であると考えられてきたためである。

一方、タイ農村の自治機能の側面に関しては、昔からタイの村落は自治機能を有してこなかったと理解されている。昔のタイ農村は、親族が互いに近隣に居住し、生産・生活両面に渡って互いに手伝い合う、いわゆる「屋敷地共住集団」を形成していた。赤木功は、そうした親族集団それ自体がかつてはバーンと呼ばれ、防衛と共同労働、社会化の三つの機能を果たしており、バーンが集まって村落（ムー・バーン）が行政的に形成さ

れたと考えている。⁽¹⁰⁾従って、バーンが持つこれらの諸機能、たとえば上記の三つの機能は、いくつかのバーンが形式的に合併されただけの村落（ムー・バーン）それ自体にはなかったのである。赤木の歴史的把握は、タイ農村を歴史的に遡って「自然村の祖型」を理解した点ですぐれて意義深いものであった。

ところで、タイ農村において村長が行政の末端役人として位置づけられたのは、タイが西欧からの外圧を受けて近代化が始まる、いわゆるチャクリ改革以降のことであった。一八九二年にテサーピバーン制度が確立され、五年後にラタナーコーシン暦一一六年地方行政法が施行され、その後一九一四年に地方行政法の施行によって郡・区・村長制が敷かれて、現在の地方行政制度の基礎が完成した。第二次世界大戦後いくたびかの変遷を経て、一九七二年に革命団布告三二六号によって区評議会（サパー・タムボン）が設置され、現在の体制が整えられた。⁽¹¹⁾こうして村長が行政村の末端の役人として、また村のフォーマルな委員会が村落内の政治的な末端の組織として導入されたのである。

サリット内閣が一九五七年に発足して農村開発政策を実施して以降、農村はかつてないほど急激な変化を被ることになる。ダムや道路の建設を始め、電気の普及、車やオートバイなどの交通手段の普及、農機具の普及、商品作物の拡大など、農業・農村の近代化が急速にすすみ、農村を取り巻く内外の環境は著しい変貌を遂げることになった。そして、そうした農村開発は一九七二年以降区評議会を通して遂行されるようになり、この会議に各村の村長が出席して政府（郡役所）の意向を拝聴し、村に帰って村人にそれを伝達するのが村長の主要な仕事になっていった。北タイでは村長がポー・ルアン（行政上の役員という意味）と呼ばれているが、それは何よりも行政上の役員としての位置づけを明確にする目的によっている。従って、政府が農村開発を推進する過程を見るならば、政府はまず村長を通して、ついで村落内のフォーマルな委員会を通して、農村開発を具体的に押し進めてきたといえる。その結果、政府は開発政策を通じて村落の政治的機能を強化し、村落支配を

遂行してきたのである。村長が屋敷地と田畑にかかる税金を村人から直接徴収しているのは、それを端的に表わしている。村落の意味をあらためて問い直す必要がこんにち新たに生じているゆえんである。

以上のような問題意識を踏まえると、政府の農村開発政策に伴って、タイ農村がどのように再編強化されてきたのかを把握することは、こんにちすぐれて重要な課題である。本稿は北タイ農村の一村落を事例にして、タイ農村がこんにち政治的にどのように編成されているのかを明らかにしようとするものであるが、そのさい村落の伝統的なシステムがどのように編成されているのか、という側面から考察することにした。以下、まづ寺院と小学校、保育園、共有地などの使用形態を村落およびコミュニティとの関係から検討し、ついで村仕事の意義を村落の側面から検討して、最後にフォーマル集団（委員会）とインフォーマル集団（組と老人組）の重層的関係において村落の政治的運営の仕方をとらえ、事例として取り上げた村落の機能がこんにちどのように再編強化されているのかを構造的に明らかにすることにした。なお、本稿では、官制的につくられた集団をフォーマル集団、その反対に自主的につくられた集団をインフォーマル集団とそれぞれ分類していること、および村ないし村落を行政村（ムー・バーン）を意味する用語として用いていることを予め断っておきたい。

二 調査地の概要

タカ村は、北タイの中心地であるチェンマイ市の南およそ二五キロに位置するランプーン市からさらに南東に約二〇キロ離れた所に位置している。伝承によれば、タカ村は、昔ビルマ軍がランプーンに攻めてきた時、ランプーンから逃げて来た国王と家臣たちが住み着いた場所であると言われている。タカという村名の意味は、一つの説は「タ」が川の意味であり、「カ」が牛の小便という意味であるとするものである（正確には、「イヤウカー」の省略の「カ」である）。アスパラートという名前の牛が小便をしながら輪を描いていたのを見て、

それを「ここに寺院を作れ」という神の教えだと解し、タカ寺院を作ったのが始まりであるという。もう一つの説は、「カカ」が市場（タラード）を意味しており、タカ村にのみ市場があるのは、タカ村が最も古く人々が居住したことを示しているというものである。これらの伝承はいずれもタカ村が移住して形成されたことを物語っている。タカ村はメーター郡（アンプラー・メーター）に属しているが、メーター郡は五つの区（タムボン）から成っている。タカ区（タムボン・タカ）はタカ村の名前を取って付けられているが、これはタカ村に市場があることに示されているように、タカ村がこの周辺一帯の中心を成してきたことを物語っている。

区長（ガムナン）はタカ村の隣のゴサイ村に住んでいて、ラムヤイや野菜、米などの農作物を農家から買って町に売りに行く仕事（カー・カーイ）をしている。彼は現在三五歳で、妻と子供一人、父親、それに離婚して一人者の兄の五人住まいである。彼は小学校（四年制）を卒業した後、パンコクに八年、友だち五人で中東に出稼ぎに行き三年余過ごした。その後、村に戻って来て木彫りをしていたが、八年前から農作物を売買する仕事に変わった。ガムナンになって五年、その前はゴサイ村の村長を二年している。

区長の主要な仕事は、区評議会（サパー・タムボン）の議長を勤めることである。この区評議会には、ガムナンのほかタカ区内の一一か村の村長と郡役所からタカ区担当の行政官と農業指導員、保健指導員、それから小学校の校長一人が書記として参加している。各村から相談役（プソン・クンナウット）など村長以外にも一人出席する決まりになっているが、彼らはほとんど出席していない。また、区医務員（ペート・プラチャム・タムボン）もあまり出席していない。郡長（ナイイ・アンプラー）は毎月開くメーター郡役所での会議（プラチュム・プラチャム・ドゥアン）で各村長に行政上の連絡事項を伝達する。その数日後、区評議会ごとに行政府が各村に沿って詳細に行政上の連絡事項を連絡し再度確認する。この会議は、郡役所が所有する場所と建物で行われている。

一九九〇年一月の時点でメーター郡全体には六四か村あり、人口は三五、八一五人である。タカ村は同時点で男子六四五人、女子七〇七人、世帯は三二二戸、家族登録は三四七戸¹²⁾、平均世帯員数は四・三人である。ランプーン県の平均耕作面積は一戸平均八・八ライ(一・四ha)しかなく、全国平均二六・五ライ(四・二ha)と比べるといかに零細な農業経営かが知られる。タカ村の田畑の耕作面積は六二一・二五ライで、出入作を除いて二戸平均約二・〇ライの耕作面積しかない(一ライは〇・一六ha)。職業構成は、同時点で米作り以外の従事している世帯が一七八戸(五七・一%)、米のほか畑作にも従事している世帯が二五三戸(八一・二%)、常設市場で商売をしている世帯は五二戸、大小の店が合わせて二四戸、木彫りが五二人いる。従って、田畑を所有していない世帯は五九戸(一八・九%)である。零細農業のため、ラムヤイやマムアンなどの果樹生産や木彫りなどの兼業が盛んに行われていて、このうち木彫りの従事者はその後著しく増加し、正確な数が分からないまでに増加している。

タカ村には中心に市場(タラード)があり、近くに寺院と小学校がある。北の川向こうには警察署と保健所がある。これらは二三年前に政府が建てたものであり、区全体を管轄している。村の入り口近くにある中学校は二五年前に建設されている。反対の南には郵便局が九年前に、電気会社の事務所が六年前にそれぞれ設けられている。さらに、村の北と南に一か所ずつ火葬場(パチャヤー)がある。タカ村の東側には雨乞儀礼をする神の祠があり、反対の西側には保育園(スーン・パッタナー・デック・レック)がある。タカ村は九つの組(ケッド)に分かれ、川の北側に組八が、さらに道路を挟んで組九があり、これらの組が村中央の市場から最も離れている。組九はかつてバーン・マイと呼ばれていた所であり、呼称からすれば、後に移住してできた派生村である¹³⁾と推察される。なお、組は五年前からムアッドという呼称からケッドという呼称に行政命令によって変更されている。

タカ村の市場は、近くに居住する老人が所有している。誰でも利用してよいが、一日二パーツから五パーツを利用する規模に応じて支払わなければならない。また、常設の食料店や雑貨店が若干あり、そこにはタカ村の人々はもちろんのこと、隣のゴサイ村、メカナ村（山岳民族が低地に降りてきて居住している村）、ナハー村などからも村人が買物に来ている。しかし、市場では毎日の朝夕におかずなどの食料品が売買されているが、この時売買に来るのはほとんどがタカ村の村人である。農村としては市場とその周囲の商店を中心にして商業活動が活発に行われていると言える。

三 寺院と小学校と幼稚園

(一) 寺院

表1はタカ区内の村々における寺院と小学校の一覧である。この表1から、必ずしもどの村にも寺院や小学校があるわけではなく、複数の村の村人が同一の寺院や小学校を使用している様子が知られる。とりわけ山頂にあるドーイカム寺院は、周囲の四か村で共用している。さらに特徴的なことには、トンファイー村の村人は別の区にある寺院に通っている。このように、寺院と小学校は必ずしもど

表1 タカ区内の寺院と小学校一覧

村落番号	村落名	小学校の有無	寺院の有無
1	トンファイー	有	別の区の寺院に通う
2	ペヤーン	▽	▽
3	ドーイチェア	有▽	有▽
4	ムアンカーオ	有○	有△
5	ゴサイ	◇	○
6	タカ	有◇	有
7	ナハー	有△	有
8	メカナ	△	○
9	パラオ	有	○
10	パダン	有	○
11	ノンブン	○	△

- 注) 1. 「有」は寺院または小学校が有ることを示す。
 2. 同じ記号は共同使用を示す。
 3. 寺院の○印は山頂にあるドーイカム寺院である。
 資料) 1990年5月の聞き取り

の村にもあるわけではなく、村や区を越えて使用されている。

これまで、タイ農村の多くの研究者は寺院をコミュニティ統合の核として理解してきた。そこで、タカ寺院の機能を村人が集会場（センター）として使用している場合と信仰の対象として使用している場合とに分けて考察してみよう。

タカ村のフォーマル集団・インフォーマル集団のほとんどすべてがタカ寺院で会合を開いている。たとえば、後述する村落委員会や村人会議のほか、青年組や老人組、婦人会などの会合が開かれ、貯蓄組合（クウム・オームサップ）は寺院で毎月集金の会合を開いている¹⁴。また、幼児の体重を三か月ごとに測るのも寺院で行っている。つまり、村内のほとんどすべての集団の会合が寺院で開かれている。しかし、タカ村の村人だけが使用しているかというところというわけではない。米銀行（タナカーン・カーオ）や農協（サハコーン・カーン・カセート）などの会合では、タカ村の村人のみでなく、それに参加している近隣の村人がタカ寺院で開かれる会合に参加している。米銀行はタカ村と隣接するゴサイ村、ナハー村三か村の一部の農民たちから構成されており、農協はタカ村とゴサイ村の農民が一つの支部を形成している。また、保健指導員（チャオティ・アンナマイ）がタカ村とゴサイ村、ナハー村の衛生委員にタカ寺院で研修（オプロム・ポーソーソー）を開いている。このように、タカ村のフォーマルな委員会、そのほかタカ村の村人がインフォーマルに形成している集団の会合がタカ寺院で行われている。そればかりでなく、タカ村とゴサイ村、ナハー村の村人が所属している集団の会合などもタカ寺院で行われている。このように、タカ寺院は各種集団の会合に利用されており、村落のみならず地域においてもコミュニティ・センターとして機能している。タイの寺院は公共性が高く、村人の生活全般に渡って重要な意味を持っている。

タカ寺院の電気代はタカ村に一二年程前に作られた寺院貯蓄組合の基金（ソガン・クロンカーン・ムニティ・

コン・ワット) から全額支払っており、この間に支払った電気代は合計で九万バーツ余にのぼる。この寺院貯蓄組合は当時の寺院委員会が発議したものであり、借金の利子を積み立てて電気代に充てている。会員は毎年出入りがあり一定してないが、ほぼ毎年六〇〜九〇人位の間で推移しており、タカ村の全戸が加入しているわけではない。また、寺院の庭にあるラムヤイの販売収入が寺院の活動資金に充てられている。

タカ寺院委員会は表2に示した各種委員会から成っているが、タカ村の村人だけが委員を構成している。寺院によく通じた老人たちが顧問委員をしており、委員長はすべて村長が兼務している。

タカ村の村人だけが寺院委員を構成している点で、タカ村の村人はタカ寺院を村落と同一視している。

「タカ寺院は村有だよ」と村人が筆者に応えていたが、こうした理解の中に村人の意識の一端が窺える。寺院委員会の構成は各寺院によって相違しており、必ずしも一律ではない。

表2 タカ寺院委員会

委 員 会 名	人数
顧問委員会 (カナ・カマカーン・ティーブルクサー)	11
寺地管理委員会 (カナ・カマカーン・バネーク・ラーン・ワット)	9
財政委員会 (カナ・カマカーン・バネーク・ヘーランジック)	6
建設委員会 (カナ・カマカーン・バネーク・サータラーヌバッカーン)	10
電気設備委員会 (カナ・カマカーン・バネーク・サーワシー)	6
広報委員会 (カナ・カマカーン・バネーク・パチャサンバム)	2
食事委員会 (カナ・カマカーン・バネーク・アーハン)	11
水調整委員会 (カナ・カマカーン・バネーク・ブルン・ドゥーム)	3
記録委員会 (カナ・カマカーン・バネーク・パントウック・カーンブラチュム)	2
総務委員会 (カナ・カマカーン・バネーク・トゥアパイ)	31
計	91

資料) 台帳より

ところで、ポッターはチェンマイ地区の事例で、組 (neighborhoods、東北タイ語でクウム) が寺院に毎日食事を持参していることを指摘していた。¹⁵⁾ タカ寺院には僧侶 (プラ) 四人と小僧 (ネーン) 八人が止住しているが、彼らの食事は村人が自主的に届けに来ており、タカ寺院の僧侶は托鉢に歩く必要がない。村人が寺院を運営し、経済的に支えている様子が知られるだろう。なお、タカ寺院に運ばれた食事は、近くの別の村に住む老人が毎日食べに来ており、貧困者に対して社会福祉の役割も果たしている。¹⁶⁾

以上のように、タカ村の村人を中心にして近隣の村人を含めて集会場としてタカ寺院が使用されており、タカ寺院がコミュニティ・センターの機能を持っていることが知られる。他方、タカ寺院において村人が宗教的行事を執り行うことは言うまでもない。タイの農村では、普通一月に四日間、仏日 (ワン・プラ) という月の満ち欠けの日に寺院にタンブン (功德を積む) に行く習慣がある。この仏日にはいつも五〇人から六〇人位の老人が出席している。村長は仏日の都度、連絡事項を参集者にマイクで伝えており、仏日は村人が寄集う契機になっている。そのほか、村人が一時的に僧になる得度式 (ブアッド) が寺院で行われ、お正月 (ソックラーン) や仏陀の誕生日 (マーカブチャー)、入安吾 (カオ・パンサー)、出安吾 (オーグ・パンサー) など特別の日には一〇〇人以上の村人が出席してタンブンをやっている。

タイの寺院はなにも村人にとってタンブンの対象であり、日本のように先祖を供養する場所ではない。タイの農民にとって、寺院はなんといってもタンブン行為を通して自分がより幸せになる機会を与えてくれる場所である。仏日ごとのタンブンを本堂の普請などにおけるいくたの寄付行為などは、すべてそうしたタンブンの行為と解釈することができる。隣村の村人が宝籤にあたって大金持ちになったが、「それは前世でタンブンをたくさん積んでいたからだ」と村人は解釈していた。寺院がタンブンの対象であるという意味において、寺院は村人にとって精神的なアイデンティティを形成する場であると言えるだろう。¹⁷⁾

以上から、タカ寺院の機能を整理してみると、まず第一に、タカ村の村人のみが構成している集団の集会場として使用されている。と同時に、タカ村の村人と隣接する村の村人と一緒に構成している集団 (association) が、その集団の会合などで寺院を使用している。これは、タカ寺院がいわばコミュニティのセンターとしての機能を果たしていることを物語っている。第二に、タカ寺院がタカ村の村人にとって主要なタンブンの対象となつている。この側面は、タカ寺院がタカ村の村人にとつて精神的な拠り所となつていることを示している。最後に、次節で述べるように、タカ寺院への寄付がタカ小学校のお金に一部回されているが、これは寺院の慈善活動の一貫として理解されうる側面である。さらに、従来、タイ政府が仏教を政治的に支配し、近代化に利用してきたことが指摘されてきたが、この側面は寺院委員会の各種委員の委員長を村長が担当していること、自分の所の寺院については組長 (ホアナークェッド) や寺院委員 (カマカーン・ワット) がタンブンのお金を徴収していること、およびよその村の寺院からのタンブンのお金に関しては、組長が各組の家から徴収して歩いていることなど、主としてタンブンのお金の徴収において具体的に窺われる。

(二) 小学校

タカ村の場合、寺院はタカ村の人々だけがほとんど使用しているが、表1で既に見たように、タカ村の小学校はタカ村と隣のゴサイ村の小学生が通学しており、一つの村の小学生だけが通学しているわけではない。小学校の場合、複数の村の小学生が一つの小学校に通学している場合は比較的多く見られる。

小学校は国有であるが、昔は寺院の中に四年制の小学校があった。タカ村の場合、寺院の敷地を分割して小学校を作ったので、現在の小学校の名前に「寺院」の字が付いてワット・タカ小学校と呼ばれている。このように寺院の敷地を分割して小学校を建てたケースは全国的に多い。ワット・タカ小学校の小学校委員会 (カナ・カマカーン・スクサー・ロンリアン・ワット・タカ) は、校長を始めとした教師九人のほかに、タカ村から村

長を始めとして九人、ゴサイ村から区長を始めとして四人の計二二人が委員を構成している。この委員会は年間三回、三月と六月、十一月に開催され、この時に来年度予算の執行や生徒の品行状況、それから奨学金の対象者の確定などについて話し合いを行っている。

タイの小学校では近年奨学金制度を設けた所が増加していることから、ワット・タカ小学校の奨学金についてここで具体的に見てみよう。奨学金にはいくつかの種類がある。一つは子供の日基金（ムニティ・ワン・デック）といい、子供の日にタカ区（タムボン・タカ）の人々が小学校委員会に持って来るお金を奨学金に充てるものである。これは比較的早くから始められたもので、タカ村だけに限られるものではなく、タカ区全体において数年前から行われている。¹⁹二つ目は、前村長が就任した五年前から今年の一月まで毎月の給料（一か月五〇〇バーツ）を小学校入学以前の子供たちを対象とした基金に充てているものである。前村長は民間援助団体（以下、NGOと略称）の経験から、これからは子供たちの教育が大切だと考えて設けたものである。この基金は、先生方に二%の利子で貸し出され、その利子だけが子供たちに給付されている。三つ目は、額については一定していないが、タカ寺院の僧侶が六年前からタン・パーパー（黄僧衣納式）に寄付された一部のお金をワット・タカ小学校に提供しているものがある。この資金で放送機器やスライド映写機などを購入したほか、一部を奨学金に充てている。四つ目は、教師九人が資金を出し合って子供一人だけに年間六〇〇バーツ貸与している基金がある。これ以外には、五年前にバンコクの企業にキャンペーンに行つて貰つた奨学金がある。しかし、これはその年だけに終わり、それ以後続いていない。最後に、三年前に日本の岐阜県の藤橋村と姉妹村になったことから、三年前に初めて奨学金が藤橋村から給付された基金がある。これはその年のみ子供たち一人に給付された最も大きな基金である。藤橋村からの奨学金はその一年限りで終わり、その後藤橋村の有志二〇名が今年から奨学金を二年間ワット・タカ小学校に提供することになっている。奨学金は小学生の中で貧

しい家庭の子供たちに一人年間三〇〇バーツずつ給付されており（一つだけ貸与があるが）、タカ村とゴサイ村両方の子供たちを対象としている。その点で、奨学金はタカ村の共有財産ではなく、ワット・タカ小学校の生徒、つまりゴサイ村とタカ村の村人を対象にしたものであると言えるだろう。

そのほか、ワット・タカ小学校では、婦人会（クウム・サットリー・メーバーン）が四年前から昨年まで一食一バーツと生徒に安く昼食を提供してきた。婦人会それ自体は古くからあり、始めは料理などを習っていたが、継続できずにやめている。昼食サービスは前村長や校長らの考えによって実施されたもので、元の資金は前村長らの寄付で賄った。当初は婦人会の会員が交代で食事係を勤めることになっていたが、来ない人が多くなったため、しばらく固定した数人だけで行っていたが、現在は小学校の前にある食堂が代わって校庭で給食サービスを行っている。

ところで、婦人会は毎月五バーツずつ積立をしており、三%の利子で一か月一〇〇バーツ、五か月間で五〇〇バーツ借用できる貯蓄組合の仕事も行っている。また、昨年の始めからは当時の前村長のアドバイスで牛銀行（タナカーン・ウア）を始めた。一四頭の牛の提供があり、二人の会員がそれを一頭七〇〇〇バーツの補償金で借り受けて飼育している。生まれた子牛は飼育者が貰えることができ、五年後に牛を返済する仕組みになっている。この牛銀行は現在までうまくいっている。組八と組九の女性は村の中央から離れていることもあって婦人会に参加していない。婦人会はもちろん希望者だけが参加しており、インフォーマル集団の一つであると言えるだろう。

脇道にそれてしまったが、小学校の校庭は地域や村の行事で利用されている。国会議員や県会議員の選挙の投票場になっており、タカ村のみでなくナー村の村人が投票に訪れている。タカ村の行事では、四月のソックランの時に小学校の校庭で新年をお祝いするソックラン・プラチャム・ピーが行われる。サーラー・ワット・

ダムファに訪れた村人が立寄って校庭は賑わい、ボクシングや踊りなどが行われている。今年から、一月一日に青年団主催のンガン・ボーン・ピー・マイが新たに始まり、ミスコンテストなどが開催されている。これらの行事にはタカ村の村人以外でも参加することができる。このように、小学校は大きな行事を行う場所として利用され、村落や地域（コミュニティ）のセンターとしての役割を果たしている。

(三) 保育園

タカ村には小学校以外に保育園がある。これまでの研究では保育園についてはほとんど取り上げられることがなかったので、本稿では詳細にみていくことにしよう。保育園は公立ではなく、村人が自分たちで作ったいわば私立である。タカ村の保育園は、一〇年以上前にタカ村の守護神（スア・バーン）があつた場所に、その祠を寺院に移して建てたものである。一九九〇年四月の時点では、保育園にはタカ村と隣のナハー村の児童一〇一人が通学していた。このように、複数の村の子供たちが保育園に通学していること、また保育園は公立ではなく、自分たちで運営しているものがタイでは比較的多く見られる。

保育園の運営には保育園委員会（カナ・カマカーン・デック・レック）があたっており、委員は全員タカ村の人が担当している。保育園の経営は、これまでカトリックの財団（スーン・パッタナー・スーン・デック・レック・バーン・タカ・サナップ・サヌーン・ドイ・シーシーエッフ）²¹から送られて来る年間約一万バーツの資金と郡役所の補助金、それに父母が子供一人に付毎月三〇バーツ（三歳児は六〇バーツ）支払うお金で運営されてきた。保育園には教師二人と行政との連絡係の計三人が勤めているが、これらの資金のうちから教師一人に付八〇〇バーツずつ計二人分の給料と行政との連絡係の人に一二〇〇バーツの給料を支払っている。カトリックの財団からはお金のほかに、子供たちが遊ぶおもちゃや道具などが送られて来る。そこで、保育園委員会は貯蓄組合（通称「七日」と呼ばれている）を作り、財団の資金を以下のように運用することを七年前に

決定している。資金を組合員に貸出し、一人に一回三〇〇〇バーツを限度に、なおかつ四万バーツの限度内で利子二％で貸与するというものである。貯蓄組合はタカ村とゴサイ村の村人から構成されており、形式上は肥料や種、農機具などを購入する農業経営のために借用できることになっている。保育園には、若干の医薬品が常備されているが、これはほとんど利用されていない。以上、タカ村の事例のように、保育園は小学校と同様に複数の村の子供たちが通園しており、保育園に提供される資金はこれまた小学校と同様に、タカ村の村人だけが共有財産として運用しているとは言えない。

今年教師たち二人が連絡係と喧嘩して、別の土地に保育園を作って分離した。土地は無料で借用し、建物に要した三〇〇〇バーツ余の費用は教師二人が自分たちのお金を出して作った。子供たちの多くは教師のいる保育園に通園しているが、公的な資金はすべて以前の保育園の連絡係に入るので、子供たちの父母から毎月貰うお金（子供一人に付一〇〇バーツ）だけが収入源になっている。保育園の分裂という事態にもかかわらず、村長始め村人は関係がないとこの問題に干渉しようとはしていない。保育園の分裂という事態は、保育園が村落の機能を果たしていないことを端的に示している。

四 共有地と村仕事

(一) 共有地

寺院や保育園以外に共有地といえるものは、前述した各組にある休憩所（サーラー・バック・ボン）と小学校の一角に一〇年程前に作った新聞を読む休憩所（ティ・ナンスピーム・プラチャム・ムー・バーン）がある。各組の休憩所は各組の村人から土地を寄付してもらい、資材は組ごとの寄付で購入し、労力は何も寄付しなかった人が主に提供して作ったものである。これは行政指導によって作られたものであり、現在は荒れはてて使用

できない所もある。新聞を読む休憩所は、小学校から道路に面した一角を借用して、その場所に自分たちで資材を購入して自主的に建てたものである。この資金は村人全体に寄付を募って賄った。しかし、一般的に施設を利用する近くの村人はそれだけ多く寄付するが、遠く離れている人たちはあまり寄付しない傾向にある。新聞は販売員が毎日無料で休憩所に置いており、経費はかかっていない。

ところで、タカ村には三つの灌漑組合（ミアン・ファイー）があるが、そのうちの一つの組合が雨乞儀礼を行う場所がその灌漑組合の共有地である。この灌漑組合はタカ村とゴサイ村、ナハー村、字バンサン（ムアンカーオ村）、メカナ村のうち、共同の用水を利用して農民一八〇人から構成されている。ほかの二つの灌漑組合はタカ村と隣のゴサイ村、字バンサイ、字シーパン（隣接する別の区にあるシーパン村の一部）の農民のうち、用水を共同で使用している一五〇人余が構成している組合とタカ村と字ペ（シーパン村）の農民四八人が構成している組合である。水利費は前の二つの組合が田一ライに付一〇〇パーツ、タカ村と字ペの農民からなる組合だけが一ライ二〇〇パーツである。田植前に用水路の清掃が義務づけられていて、出不足金は各組合とも一人一日一〇〇パーツである。しかしながら、こうした出役義務は組合ごとに決められており、また組合員だけに課されているものであって、タカ村の全戸に課されるものではない。出役義務はどんなに大きくても一区画の田に付一人一回であり、小さくても数カ所に田を分散して所有している者は、その数だけ出役しなければならぬ。また、一カ所に親子で田を所有している場合には、一人だけ出役すればよいことになっている。土地が売買されて別の人の手に渡った場合は、その土地の所有者に原則的に水利費や出役義務が課される。北タイの灌漑組合は長い歴史をもっており、自然発生的に生まれたインフォーマル集団であることは言うまでもないだろう。

タカ村とゴサイ村、ナハー村の三か村の農民はタカ区担当の農業指導員（カセート・コン）の指導で六年前

に米銀行（タナカーン・カーオ）を設立した。米倉は郡役所（政府）が提供した資金四万バーツで作り、場所はゴサイ村の村人から寄付された土地を充てた。米銀行は組合員が最初に一定以上の資金もしくはお米を拠出して作ったものである。米銀行の組合員は三か村合わせて二六五人いるが、米銀行はタカ村の村人だけが組合を構成しているわけではなく、三か村の希望者によって構成されている。行政指導によって作られたものであるが、出資額に応じてお金やお米を借用できるし、かつまた利益が還付される。米銀行が作られた経緯のみならずこうした性格からしても、米銀行はインフォーマル集団ではなく、フォーマル集団であるといつて差し支えないだろう。²³

タカ村には火葬場が二か所あるが、火葬場は国有地である。二か所の火葬場はタカ村内ではそれぞれ利用する組（ケッド）が違う。村の北にある火葬場は川の北にある組八と組九、そのほか隣接した区よその村の一部（字ベ）が使用している。南にある火葬場は残りの七つの組とゴサイ村、ナハー村の村人が使用している。筆者の調査経験からして、このように複数の村人が一つの火葬場を共用している場合が比較的多いと思われる。火葬場には火葬する建物（メーン・パオ・ソップ）や休憩所が作られているが、それらはそれぞれ使用する村人たちが寄付を出し合って作ったものである。従って、火葬場の施設はタカ村全員が平等に負担して作ったものではない。

北タイのほとんどの村には葬式組（クウム・チャバナキッド）があるが、タカ村の葬式組にはゴサイ村とナハー村の一部の村人が参加している。普通、複数の村人が隣接する村の葬式組に参加し合っているため、組合員と村の全戸とが一致することはない。タカ村の葬式組では葬式のたびごとに一人一〇バーツ支払う仕組みになっている。組合の加入単位は家族ではなく個人であり、一家族から何人加入してもよい。葬式の当日、人数分のお金を家族の代表者が持参している。葬式の手伝いは、親戚を中心にして手伝ってもらったら手伝い返す

労働交換制である。手伝ってくれた人を覚えておいて、手伝い返すという。葬式を出した家は葬式組に対して集まった香典のうち五%のお金を提出しなければならない決まりになっていて、この資金はテントや器具などの購入に使われている。このように、葬式組は村人だけに限られず隣接する村の村人を含んでおり、また葬式は村を挙げて行われているのではなく、近隣の村を含めて個人単位の加入制で葬式組が村落ごとに古くから形成されてきていることから、葬式組は自然発生的に生まれたインフォーマル集団の一つであると言えるだろう。

(二) 村仕事

村仕事はタムガン・ムー・バーンと呼ばれ、道路や用水、橋などの掃除と修理がある。これは国王の誕生日(ワン・ポー)や王女の誕生日(ワン・メー)などの特別の日に、組ごとに組長の指示の下で行われている。前村長によると、村仕事に出役しない人は不足金が一日五〇バーツ課されるというが、実際には徴収されたこととはない。ある組で早く仕事が終わったら、別の組の仕事を手伝うこともあるが、基本的には村仕事は組ごとに行われている。しかし、村仕事といっても出役しない人も多く、必ずしも村規制が強く働いているとはいえない。昨年一二月に亡くなったタカ寺院の僧の火葬が今年四月に行われることになったが、そのための火葬場の準備を村人総出で数日間行った。この火葬場の清掃(パッター・パチャー)も村仕事の一つである。しかし、この時も必ずしも全戸が出役していない。多く見積もってもおそらく半分位の家の村人しか参加していなかったであろう。昨年政府の資金で設けた地下水を汲み上げるポンプの修理には、わずかな村人だけしか出役していなかった。このように、村仕事といっても実際には出役してもしなくてもよく、村規制は実質的には働いていないと言えるだろう。

このほか、村の制裁には、村仕事に伴う不足金のほかに、喧嘩をした村人は村(村長)と警察に五〇〇バーツずつ支払うことを決めているものがある。こうした決まりは前村長が元N.G.Oの開発指導員であった経歴ゆ

えに作られたものであるが、実際にはこれまで支払われたこととはなく、村規制がきわめて緩いことを示している。しかも、今年の村長の交代に伴って、こうした決まりは反故になっている。

五 フォーマル集団と伝統的システム

タカ村の村長を始めとする役員は表3に示した通りである。タカ村には副村長が四人いるが、そのうち二人は村長が選び、残りの二人と相談役は村人が選ぶ仕組みになっている。前村長は現在三八歳で、五年前にタカ村に戻って来るやいなや村長に選ばれている。彼は大学出のいわばエリートであるが、五年前に村長に就任する以前はNGOの開発指導員を勤めていた。しかし、所属していたNGOが資金面でトラブルを起こして活動ができないままにふるさとに戻ってきた。当時の前の村長が更迭された理由は、用もないのに会議を開いたりして、村人の信頼がなかったからである。そして、前村長は村の仕事をおろそかにしていると批判され、今年二月の村人会議でやめさせられた。代わって、精米業をしている副村長が村長に選ばれている。⁽²⁴⁾

表3 タカ村の村役員

役職	年齢	職業	主な経歴
村長	46	精米業	リビアに6年出稼ぎしていた
副村長	34	木彫り	
副村長	44	農業	副村長を以前2年勤めていた
副村長	35	木彫り	リビアに3年出稼ぎしていた
副村長	34	木彫りの会社に勤める	小僧(ネーン)を8年、サウジアラビアに3年半出稼ぎしていた
相談役	37	板金工	たいへんまじめで、善良、評判がよい

注) 今年2月に村長が辞めさせられて、44歳の副村長が村長になった。代わって、副村長に34歳の木彫りをしている人が選ばれている。

資料) 1992年4月の聞き取り

タカ村には表4のような中央委員会と七つのフォーマルな委員会があるが、これらはどこの村にも行政指導によって設けられているものである。⁽²⁸⁾これらのフォーマルな委員は、一部役員を除いて、村人が委員全員を選出することになっている。フォーマルな委員会はもともと郡役所から指示されて組織したものであり、実質的に一部機能しているものは中央委員会と財政委員会のみであり、そのほかはあまり機能していない。たとえば、赤ちゃんの体重を測るのは本来衛生委員の仕事であるが、委員は何もしないでボランティアが保健所(アンナマイ)から計測機を借りてきて代わりに行っている。中央委員会(カナ・カマカーン・カーン・クラーン)は前村長と二人の副村長(木彫りの会社に勤めている人と農業をしている人)、相談役、木彫りの親方でなおかつ財政委

表4 タカ村のフォーマルな委員会

委員会名	成員数	議長
中央委員会 (カナ・カマカーン・カーン・クラーン)	9	村長
職業開発委員会 (ファーイ・パッターナー・クロンカーン・アーチーブ)	7	村長
行政委員会 (ファーイ・ポックローン)	6	村長
保安委員会 (ファーイ・ラクサ・クワームサゴブ)	6	村長
財政委員会 (ファーイ・カーン・ンガン)	5	委員の1人
衛生委員会 (ファーイ・サタラナスグ)	5	委員の1人
文教委員会 (ファーイ・カーン・スクサー・ワッタナタム)	7	委員の1人
福祉委員会 (ファーイ・サワディカーン・サンコム)	6	委員の1人

資料) 1990年5月の聞き取り

員会の委員長をしている村人、財政委員をしている村人、大工をしている二人の計八人から構成されていた。しかし実際には、この中央委員会だけで会議を開いたことはない。

それでは、村長が物事を決める手続きを具体的にみてみよう。まず始めに、村長は毎月開かれる郡役所の定例会議に出席し、その後開かれる区評議会に出席する。区評議会については、前述したので省略するが、郡役所から住民に伝達したり、配布しなければならないことがこの区評議会に徹底される。村長はあえて村落委員会（カナ・カマカーン・ムー・バーン）を開く必要がないものについては、放送器を用いて住民に伝えて済ます。村落委員会を開いて決める必要があるものについては、放送を通じて会議開催する旨を連絡する。この村落委員会にどの委員を参加させるか、つまり誰と相談するか、すべて村長の考えしだいである。全員の総会を開いたほうがよい場合には、村人全体の会議を開いて決めるが、全員を召集する会議は前村長の時にはめったに開かなかった。⁽²⁶⁾村長がよく開催して相談するものは村落委員会である。村落委員会は形式上行政指導によって作られたものであり、その点フォーマル集団の一つと言えるが、その運用の仕方については様々である。

例えば前村長の場合、中央委員会の委員と先にあげた七つの委員会の委員長（委員会のうち三つだけ村長が委員長を兼務している）、各組の組長九人が

表5 タカ村内の組と組長の職業

組番号	世帯数	組長の職業	副組長の数
1	35	豚肉販売	2
2	41	木彫り	1
3	38	電気工	2
4	44	農業	3
5	34	木彫りの親方	2
6	33	木彫り	0
7	29	床屋（女性）	1
8	24	農業	3
9	35	農産物販売	3

資料) 1990年5月の聞き取り

参加して村落委員会が開催されてきた。村長が委員長をしているフォーマルな委員会は別の委員が委員会の代表として参加する。今年村長が交代したが、新村長は組長と役員のみを自分の家に集めて村落委員会を開催している。村長によって、誰を参集させるかが異なっていることが分かる。また、新村長は村人会議（プラチム・チャオ・バーン）をしばしば開催しており、村長によって会議のもちかたが著しく相違している。しかし、組長と役員を集めて村落委員会を開催する点においては共通している。

ここでは村落委員会の構成員にはフォーマルな委員のほか、インフォーマルな組長が参加している点が注目される。組の構成と組長の職業については表5に示しておいた。組長は組ごとに選ばれ、長く勤めている人もいれば、一年ですぐに交代する人もいる。組によって組長を補佐する副組長の数が異なっており、副組長を何人にするかも組ごとに決められている。こうした組の形成は伝統的なものであり、インフォーマル集団の一つである。しかし、現在では組長がフォーマルな形で村落委員会に組み込まれているため、フォーマル・インフォーマル両面を兼ね備えている。組長の主要な仕事の一つは、このほかによその村の寺院から依頼があるタンブンのお金をそれぞれの組内の家から徴収して集金することである。タカ寺院のタンブンのお金を集金する仕事は寺院委員会と別に自主的に設けた宗教委員会（カナ・カマカーン・サッサナー）の委員が主として行うわけであるが、組長はこれを手伝うこともある。こうしたタンブンのお金を集金して歩く仕事は、古くから行われている組長の仕事の一つである。また、郡役所から数年ごとに貧しい人に提供される毛布などの支給品を、各組の貧しい村人に分配する仕事をしている。

筆者が調査した別の村は比較的昔の形を残しているが、行政命令以降の現在も組はムアッドと呼ばれるされており、また組が寺院に食事を運ぶ単位であること、組長が組内の人の香典を集金していること、さらに放送器が使用される以前は、各組に連絡係がいて村長からの連絡を各戸に伝えており、連絡係の仕事は毎年交代し

て無報酬で勤めていた。また、カイズは東北タイでは組 (khum) は親族からなり、共通の姓を付けているが、結婚を規制したり、経済的な共同集団を形成したり、祖霊祭祀をしたりしていないこと、および組のすべての世帯が共同してタンブン儀礼を行っていることを、友杉は一八九七年以前は組が搖役徵発の単位であったことをそれぞれ指摘している。⁽²⁸⁾これらの点を考え合わせると、赤木の言うように、組はかつて親族集団が形成したバーンを中心にして発展し、それに非親族者がしだいに周囲に居住するようになって発展したものと推測される。

タカ村の村人ならば誰がどの会議に参加してもよいことになっているが、村落委員会にある時老人二人が自主的に参加していた点は無視することができない。さらに、前村長は、特に老人のうちで代表的な一二人の意見をよく聞くことにしていた。彼らは僧の経験者 (二人) や小学校の教師や校長の経験者 (四人)、村長や区長の経験者、それ以外には、よその事情についてよく知っている人や各種委員を歴任した誠実で評判のよい人 (二人)、仲裁がうまい人、最高齢者の老人の一二人である。彼はお寺の問題を始め多くの問題について老人に相談しているが、問題の性質に応じてどの老人に相談するかを決めると言う。NGOの経験から、彼は「私 গতとえこつちの方向を指示しても、老人たちがあつち、あつちと別の方向を指示すれば、村人たちは老人の言う方向に付いて行きますよ」と、老人が伝統的に村の指導者である点を強調している。

六 結びに代えて

本稿は、タカ村を事例として、寺院と小学校、さらに保育園の利用、灌漑組合、葬式組、米銀行などの運用方法、および共有地と村仕事による村規制と村落の政治的運営方法を明らかにすることによって、タカ村が村落としてしだいに政治的に支配、編成されてきた諸側面を明らかにしてきた。

タカ村では、インフォーマル集団である灌漑組合や葬式組、さらに行政指導によって作られた米銀行などは、

近隣の村人を含めて個人的に形成した集団 (association) であり、村落の機能と関係がないと言えるだろう。そして、これまでコミュニティを統合するシンボルとして考えられてきた寺院については以下のように言えるだろう。寺院が村人の集会場として使用されている側面は、寺院が村落や地域のセンターとしての役割を果たしていると言えるだろう。小学校が国有なのと違って、寺院は「村有地」であり、村人が主体的に運営している点で小学校と相違している。にもかかわらず、それはタカ村の事例について言えることである。というのは、近隣のゴサイ村やナハー村などには寺院がなく、タカ村のように一村一か寺ではなく、複数の村が一つの寺院を利用していることを見れば、寺院が村落機能を代替しているとは一般的には言えないからである。また、タカ寺院にはほとんどタカ村の人々だけがタンブンに来ている。タカ寺院がタカ村の村人にとってタンブンの対象であり、寺院での儀礼一つひとつが村人にとって重要なものであるという意味において、タカ寺院がタカ村の村人にとって精神的なアイデンティティを形成する場をなしている。寺院は村落や地域の集会場としてのセンターの機能と精神的な拠り所としての機能の二重の意味を持っているのである。

その一方、ワット・タカ小学校にはタカ村とゴサイ村の小学生が通学していること、および数年前まで組八と組九の子供たちがシーパン村の小学校に通学していたことを考え合わせると、ワット・タカ小学校に村落機能を見出すことはできない。しかし、村の行事が校庭で行われており、村落や地域のセンターとしての機能の一部果たしていると言える。また、保育園についてはタカ村とナハー村の子供たちが通園しており、そこに村落機能を見出すことはできないだろう。まして、今年二月に教師と連絡係が喧嘩分かれし、敷地を教師たちが自分で建てた施設で公的な資金も受けずに保育園を行っている状況からすると、そこに村落や地域のセンターとしての機能を見出すことはましてできない。しかしながら、カトリックの財団からの基金を利用して貯蓄組合を作り、タカ村とゴサイ村の村人に貸出しているのは、村落ではなく地域の中で基金を共有財産として運用

していることを示している。共有地については、タカ寺院を除くとタカ村自体のものは保育園の敷地しかないが、保育園は前述したように村落機能を果たしていない。村仕事においては出役しない人に過料が課せられているというが、それは名目だけであり、出役しない人が多いにもかかわらず実質的には過料されていない。その点、日本のように村仕事に厳しく全戸の出役が義務づけられて行われておらず、タカ村の村仕事の中に村落規制を見出すことはできない。以上のように、寺院と小学校が村落および地域のセンターとしての機能を一部果たしていると言えるが、そのほかのものは村落機能を果たしているとは言えない。

農村開発の具体的中身については、ここで逐一取り上げることができないが、農村開発は郡役所から区評議会に行政上の連絡、指示が増加する事態となって現れている。区評議会には各村から村長が出席しており、村長は村に帰って村人に行政上の事項を連絡し、必要であれば関係の委員会を召集して決定する。こうした村内での中央委員会を始めとする各種のフォーマルな委員会は、行政指導によって設けられたものであり、同時に村内において村長の機能を強化し、それを通して村落（ムー・バーン）を支配するものであった。しかしながら、タカ村内でのフォーマルな委員会の持ち方を見ると、形式的に中央委員会を始めとする八つのフォーマルな委員会が重視されているわけではないことが分かる。実質的に一部機能しているのは村落委員会と財政委員会のみにすぎず、ほかの七つのフォーマルな委員会はほとんど機能していない。村長は相談事項の性質によって、どの範囲の委員会を開くか、どの人と相談して決めるかを自分の判断で決めるわけであるが、タカ村で一番多く開かれているのが村落委員会であった。村落委員会は、前村長の時には中央委員のほかにさらに七つの委員会の委員長とその他の人々が出席して会議がもたれていた。新村長に至っては、これらフォーマルな委員会の議長を召集せずに村落委員会を開催していた。このように村長が交代することによって村落運営が異なることは、北タイ農村ではしばしば見られることである。

この村落委員会にはフォーマルな委員のほかにインフォーマルな人々が参加しており、その人たちは組長（ホアナー・ケッド）と自発的に参加していた老人（コン・ケー）たちであった。組長は、政府から数年ごとに支給品を負しい村人に分配する仕事をしたり、組内の村仕事の世話をしたり、免除券申請者（バッド・ソック）を村長に届け出たり等々、村内の重要な仕事を遂行している。こうした組長の仕事は、村落の政治的支配がすすむにつれてしだいに増加してきたものである。とりわけ、組長が寺院のタンブンのお金を徴収して歩いている点は、仏教が村落の組織構成を利用しての側面であるといえる。さらに敷衍して言えば、国家が仏教を通して村落の伝統的な組織構成を利用し、村人からタンブンのお金を徴収しているといえるだろう。村落の政治的運営の中にインフォーマルな組長が参加しているのは、組が村落運営にあたって伝統的に重要な意義を村落委員会が作られる以前から村落内において有してきたからである。それはなかならず、タンブンのお金を徴収する仕事を通して、組長ないし組が重要な役割を持つに至ったためであると推察される。また、村長が寺院委員会のすべての委員長をしていることは前述した通りである。これらの点は寺院が国家による村落の政治的支配においても一定の役割を果たしていることを示している。なかでも、行政指導によって組の呼称がムアドからケッドに変更されたことは、何よりも村落の政治的支配を末端にまで進めていることを、つまりインフォーマルな組長をフォーマルな形に組み替えようとしていることを象徴的に表わしているとは言えないだろうか。村長が村人の屋敷地と田畑にかかる税金を徴収していることもまた、村落の政治的支配を端的に表していると言えるだろう。それから、老人が自発的に村落委員会に参加していたり、前村長が老人のリーダーたちに相談している点は、チャティブ・ナートスパークがタイ農村はかつて長老制であったと述べている点と照らし合わせて考えると、現在も長老制の姿が全く失われたわけではないと言えるだろう。タカ村では寺院が村落や地域のセンターの機能を果たしていたわけであるが、その寺院を運営する寺院委員会においても組長と老人が中心的な位置を占めていることにあらためて注目する必要があるだろう。

以上のように、タカ村においては郡役所から行政指導で設けられた中央委員会を始めとする八つのフォーマルな委員会が村を運営しているのではなく、それら是一部を除いて実質的にはほとんど機能していない。それに代わって、タカ村では実質的にはインフォーマルな組長と老人たちが村落の政治的運営において重要な役割を果たしている。とりわけ、組長は村落委員会を構成するメンバーであり、インフォーマルな地位からしだいにフォーマルな地位へと組み込まれている。政治的近代化の再編によって、村人は伝統的な政治的運営を放棄して新しい近代的な組織を取り入れたわけではない。そうした伝統的なインフォーマルなシステムを生かす形で、近代化による村落の政治的支配がしだいに進展していると言えるだろう。

政府・NGOを問わず、こんにちの農村開発は「自力更生 (self-reliance)」が強調されて実施されている。NGOが政府の補完的活動をしているとすら言える状況が見られる。こうした姿は、我が国において日露戦後「自力更生」を唱えた地方改良運動を想起させるものが何程かある。タイにおいて現在行われている農村開発を理解するためには、村落内集団を官制的なフォーマル集団と伝統的ないし自主的インフォーマル集団に分類した上で、村落と地域（コミュニティ）の中におけるそれらの機能について予め検討しておくなければならないことは言うまでもない。現在行われている政府とNGOの「自力更生」を唱える農村開発は、村落に居住する農民の観点から今後検討されなければならない重要な課題の一つである。

（付記）本調査は松下国際財団の助成金によって平成二年四月から七月までの間行われた。また、平成四年三月に補充調査を行った。本調査を実施するにあたって、中京大学教授中野卓氏、三重大学助教授武笠俊一氏、チェンマイ大学教授バンスーン氏、アジア研究センターのセクシン所長を始めタカ村の多くの村人の御協力をいただいた。松下国際財団を始め各位に対して感謝申し上げたい。なお、時期の明記のない数値に関しては、すべて一九九二年三月時点のものである。

注

- (1) Sharp, L. and Hanks, L.M. 1978. *Bang Chan*. Ithaca, Cornell University Press, p.23.
- (2) Kingshill, Konrad. 1960. *Ku-Daeng-The Red Tomb*. Bangkok, Sunitayaban Publishers, p.104.
- (3) カウンマンは寺院がコミュニティの宗教的、社会的センターの役割を果たしていることを指摘している (Kaufman, H. 1960. *Bangkok-A Community Study in Thailand*. J.J.Augustin Incorporated Publisher, Locust Valley, New York, p.104.)。また、寺院が村落のシンボルであると表現しているのはポッターである (Potter, J.M. 1976. *Thai Peasant Social Structure*, Chicago, Chicago University Press, p.35.)。なお、ワイヤワデーオンは寺院が国家が寺院自体の所有地である点を指摘し、寺院を村落やコミュニティと同一視する誤りについて指摘している (Wileyewardene, G. 1967. "Some Aspects of Rural Life in Thailand," *Thailand: Social and Economic Studies in Development*, edited by T.H. Silcock. Canberra, Australian National University Press, p.71.)。しかし、法律上はともかく、一部王立寺院を除いて、大半の寺院が村有地のごとく管理使用されていることは事実であり、また村人にとって重要な側面である。
- (4) 友杉孝「チャオ・プラヤーデルタの稲作と社会」石井米雄編著『タイ国』創文社、一九七五年、九六―九八ページ。
- (5) 水野浩一『タイ農村の社会組織』創文社、一九八一年、一六〇ページ。水野はドンデン村の機能集団として、寄進委員会と教育委員会、村落開発委員会をあげているが、村落開発委員会を自治組織ととらえている点は村落をフォーマル集団・インフォーマル集団の両面からとらえていないことを示している。なぜならば、村落開発委員会は形式上行政指導によって作られたものだからである。しかし反対に、初期の水野は村落開発計画の

実施に伴って、村長らの地位が強化されていることを指摘している点は注目に値する。

- (6) 水野、前掲書、二〇四ページ。
- (7) 関泰子「タイ農村の社会構造に関する一考察」『国際関係学研究』NO・13別冊、津田塾大学、一九八六年、三ページ。
- (8) Potter, op. cit., p.219.
- (9) 行政的変遷については、橋本卓「タイの地方行政と農村開発―その制度と担い手―」『アジア経済』二五巻一〇号、一九八四年、同「タイの地方自治制度―形式自治から実質自治への転換をめぐって―」『北九州大学法政論集』一六巻三・四合併号、一九八九年を参照されたい。
- (10) 赤木功「タイ農村における権威基盤試論―ヘバーンをめぐって―」『現代アジア政治における地域と民衆』大阪外国語大学アジア研究会、一九八三年、一四七ページ。なお、チャテップ・ナートスパーは昔のタイ農村は「共同体」であったとしているが、さらに実証的データを吟味する必要がある(Charith Nartsupha, 1984, *Sethakri Mubon Thai nai Adi, Bangkok*.) (『タイ村落経済史』野中耕一・末広昭編訳、井村文化事業社発行、勁草書房発売、一九八七年、八ページ)。というのは、彼が参考としている田辺のデータはシップ・ソン・パンナーであり(水利の共同体規制があったとされているが)、それは北タイのデータそれ自体ではなく、あくまでも推論にすぎないからである(田辺繁治「タイ旧制度下の国家領域に関する一考察」『東南アジア研究』一〇巻二号、一九七二年、二六八ページ)。
- (11) タイ政府が一九七五年に資金還流(パン・グリーン)計画を実施した様子については、Nimit Phumitawon, 1981, *Krasuang Khlang Klang Na, Bangkok Samai Phumitawon*. (野中耕一編訳『農村開発顧末記』井村文化事業社発行、勁草書房販売、一九八三年)を参照されたい。また、農村開発において区評議会が果たす役

割については、赤木功「開発行政と地方政治―「タンボン議会」を中心に―」北原淳編『タイ農村の構造と変動』勁草書房、一九八七年を、村長の立場にうつすは Michael Moerman, "A Thai Village Headman as Synaptic Leader," Charles Keyes, "Local Leadership in Rural Thailand," edited by Clark D. Neher, 1979. *Modern Thai Politics from Village to Nation*. Schenkman Publishing Company. さざれれば参照されたい。

(12) 村人は村外へ転出しても籍を移動しない場合が多く、またその反対に同居してきても家族登録を一つにしな
い場合など様々ある。タカ村では、親族が一緒に同居していても、家族登録を別にしてしている場合がたくさんある
ため、世帯数と家族登録(タビアン・バーン)数とがズレている。

(13) かつての呼称ムアッドは「集団」という意味であったが、新しい呼称ケッドの意味は「範囲」であり、「集
団」の意味が含まれていないことに注目したい。

(14) タカ村には貯蓄組合が六つあり、古いもので二一年前からある。これらはいずれもタカ村の村人のみから構
成されており、後から加入できないという特徴を有している。

(15) ポッターはチェンマイ地区では、組が寺院に食事を毎日運んでくる単位であることを紹介している
(Potter, op. cit., p. 147)。なお、筆者はチェンマイ県の別の村で組(ケッド)ごとに毎日交代して食事を運
んでいる事例に遭遇し、このケースについて確認している。

(16) そのほか、タカ寺院では日曜日の午前中に若い僧侶が子供たちに仏教を教えている。タイの寺院はもともと
教場、病院、養老院、村役場、夜宿所、裁判所、博物館などの多様な場所であった(石井米雄『上座部仏教の政
治社会学』創文社、一九七五年、五二ページおよび二四六ページ)。

(17) 村人にとって僧侶はタンブンの対象であると同時に、現世の災いを除去してくれる呪術力の源泉(「清浄性」)

を持っている存在である（石井、前掲書、八六ページほか）。

(18) 石井、前掲書および田中忠治『タイ—歴史と文化』日中出版、一九八九年を参照されたい。

(19) チェンマイ地区では、ポッターたちが寺院に寄付した二五〇〇バーツを奨学金に回して、その利子を恵まない小学生に奨学金として貸している（Potter, op. cit., p. 41）。

(20) 小学校の昼食サービスは、現在タイのNGOが積極的に取り組んでいるプログラムの一つである。

(21) この財団は、Christian Children's Foundation of Thailand (CCF) とある。

(22) シブ・ソン・パンナーにおいては、かつて田の水利をめぐって共同体的規制が行われていた（田辺、前掲論文、二六八ページ）。しかし、筆者の別の村の調査では、一つの村に一つの灌漑組合しかない場合でも、全戸から出役するのではなく、組合員のみが用水掃除に出役しており、一般的に灌漑組合に村規制を見出すことはできないと考えている。

(23) 寡聞では、米銀行は現在の国王が考案した説と北タイのランバン県のタオ・ラ・ナム氏が考案したという説と中央のチャイナ県のルアン・スクサワット氏が考案したという説の三種類がある。

(24) 元NGOの前村長は今年二月の村人会議において村長を更迭されている。その理由は、村の仕事、たとえば水を汲み上げるポンプの修理等をなおざりにして修理しなかった等、自分のことばかりおこなっていたからである。その結果、四六歳の副村長が村長に選出された。そのため、代わりに新しく一人副村長が加わったほかには役員には変わりがない。

(25) 中央委員会以外の七つのフォーマルな委員会は、以下のような仕事を担当している。職業開発委員会は農業収入を増やしたり、組合を結成して協力し合うことなどを推進する人々である。行政委員会は紛争を解決したり、村の統一を図ったり、民主主義を守っていく係である。保安委員会は村から犯罪をなくし、また村を外部から守

る仕事をする。財政委員会は部落のお金を預金し、運用にさいして適切性を検討する機関である。衛生委員会はトイレの清掃や子供の健康づくり、家族計画などに従事する人々である。文教委員会は地域の文化や習慣を守り、コミュニケーションを相互にうまく図っていく係である。福祉委員会は村人の施設や健康づくりにあたる人々である。

(26) 筆者の調査経験からすると、チェンマイ県サンパトーン郡トンケーオ村では、毎月村会議(プラチュム・チャオ・バーン)が開かれ、各世帯から誰かしらが出席しなければならず、村長が交代した五年程前から欠席すると罰金が課されていた。こうした事例を見ると、タイ農村は決して村落の構造がルースであり、また自治的側面が弱いとは必ずしもいえないが、こうした傾向は近年見られるようになったことに注目すべきである。村会議や村のお金は、近代化の進展に伴って必要になり、重要な意味を帯びてきたものである。

(27) Keyes, C.F. "Kin Groups in a Thai-Lao Community," edited by Skinner, G.W. and Kirsh, A.T., Ithaca, 1975. *Change and Persistence in Thai Society*, Cornell University Press, pp. 280-281.

(28) 友杉、前掲論文、九六ページ。

(29) ナートスパー、前掲書、九ページ。